

つくり手の想いが結晶し、その輝きが心揺さぶる。

★・・・ゲスト来場予定

22日(金) 15:30～『ヒミズ』(129分)



作り手の体験や思いが強く込められた作品には、独特の熱が放射され、圧倒させられる。つねにオリジナル作品を手がけてきた園子温監督が、『ヒミズ』で初めて熱狂的ファンを持つ漫画を実写化。監督自身、自分が20代の頃につくった自主映画作品に近いと語るこの作品は、原作の設定を東日本大震災後の日本に変えて、醒めた目で生きる少年と少女の絶望の叫びとその先を熱く描いた青春感動作だ。



©ヒミズフィルムパートナーズ



染谷・二階堂の演技は情熱と感情ではちきれんばかりで、青春がスクリーンで爆発しているようだった。

ダーレン・アロフスキー アメリカ映画監督



園子温 (その・しおん)

1961年愛知県生まれ、『俺は園子温だ』『男の花道』などの8ミリ自主映画で衝撃的に登場し、『自転車吐息』『自殺サークル』『紀子の食卓』など他に類のない劇場映画を連発。4時間に及ぶ『愛のむきだし』(09年)でベルリン国際映画祭カリガリ賞、国際批評家連盟賞をW受賞、『冷たい熱帯魚』(11年)は新宿アトルの動員数を塗り替える記録を樹立。2012年10月には原発事故に翻弄される家族を描いた『希望の国』が公開された。

『ヒミズ』

22日(金) 18:30～『鍵泥棒のメソッド』(128分)



内田けんじ監督の長編第3作『鍵泥棒のメソッド』。不思議なタイトルの後半部分の由来は、自分を役者と信じ込んだ、本当は殺し屋の男が、メソッド・アクティングという演技法の指南書を熟読、役になりきる極意を会得しようとするところから。ともに名優の堺雅人が売れない役者に扮し、香川照之が本で演技法を学ぶ、そのおかしさ! さらに広末涼子のコメディエンスぶりにも脱帽だ。



©2012『鍵泥棒のメソッド』製作委員会



卓越したストーリーテリングと見事な演技が融合し、ギャング映画とロマンティック・コメディを合体させた完璧に独創的かつ説得力に満ちた作品。トッド・ブラウン カナダ・ウェブサイト「Twitch」創設者



内田けんじ (うちだ・けんじ)★

1972年神奈川県生まれ。1998年にサンフランシスコ州立大学芸術学科映画科を卒業後、自主制作長編『WEEKEND BLUES』で大きな注目を集める。劇場デビュー作『運命じゃない人』(04年)はカンヌ国際映画祭でフランス作家協会賞、鉄道賞、最優秀ドキュメント批評家賞、最優秀ヤング批評家賞の4冠に輝く。前作『アフタースクール』(08年)は全国で大ヒットロングランを記録。緻密な脚本設計に裏づけされた意表を突く映画の大手。

『鍵泥棒のメソッド』

23日(土)12:00～『聴こえてる、ふりをしただけ』(99分)



精神科の看護師であり、2人の子供の母親でもある今泉かおり監督。初の劇場長編作『聴こえてる、ふりをしただけ』を、自身の子供時代の記憶を元に練り上げた。母親が急死した11歳の少女が、守り手のいない世界に放り出され、日々直面する問いにひとり手探りで対峙していく。観客はときに母親のような気持ちで彼女を見守り、また、自分自身が11歳のころに今いちど戻ったような心地で、彼女とともに心の再生を経験する。



シンプルなストーリーの奥で「死後の世界は存在する?」するとしたら「死者の魂はいつまで家族のそばにいてくれる?」といった質問をこの作品は投げかける。今泉の作品には、亡くなった女性の姿こそ見せないものの、その優しい魂が作品全体に主旋律のように漂っているのだ。デレク・エレイ イギリス映画評論家



今泉かおり (いまいずみ・かおり)★

1981年大分県生まれ。ENBUゼミナールで映画制作を学ぶ。卒業制作の短編『ゆめの楽園、嘘のくに』が2008年度の京都国際学生映画祭準グランプリに輝く。第7回シネアスト・オーガニゼーション大阪(CO2)の助成対象作品に選ばれた『聴こえてる、ふりをしただけ』は初の劇場長編作品で、長女の育児休暇を利用して制作。現在、精神科の看護師をしながら2人の子供を育てている。

『聴こえてる、ふりをしただけ』

23日(土)15:00～『かぞくのくに』(100分)



1970年代初頭、在日コリアン2世のヤン・ヨンヒ監督は帰国事業により北朝鮮へ渡る3人の兄を見送った。『かぞくのくに』はヤン監督の実体験をもとに書き下ろした自身の劇映画である。25年ぶりに日本に戻ってきた兄と、家族、旧友たちのなるべく自然にふるまおうとする表情に、言葉に、万感の思いが込められる。再び北に戻ればもう二度と会えないかもしれない理不尽な現状が改めて突き付けられ、家族の思いに胸がしめつけられる。



©2011『かぞくのくに』製作委員会



観客の心をつかんで離さない物語、説得力のあるカメラワーク、的確な演技という各要素が見事に結実し、「喪失」や「希望」、「家族の愛」についてエモーショナルに訴えかけてくる、繊細かつ力強い傑作。クリストフ・テルヒベ ベルリン国際映画祭



ヤン・ヨンヒ (やん・よんひ)★

1964年大阪府生まれ。大阪朝鮮高級学校の国語教師、劇団女優、ラジオパーソナリティを経て、95年からドキュメンタリーを主体とした映像作家として作品を発表。2005年に初の長編ドキュメンタリー映画『Dear Pyongyang ディア・ピョンヤン』を発表、サンダンス映画祭審査員特別賞などを受賞。第2作『愛しきソナ』(09年)はベルリン国際映画祭フォーラム部門に正式出品された。本作は初のフィクション映画。

『かぞくのくに』

23日(土)18:30～『KOTOKO』(91分)



塚本晋也監督が「もっとも尊敬するシンガーソングライター」であるCoccoを主演に、監督自身もその相手役として出演する『KOTOKO』。入念なインタビューをもとにCoccoと監督が作り上げたCocco演じる女性は、幼い息子愛するがあまり時に暴力的になり、その牙を自分にも他者にも向けてしまう。愛する者を失う不安が痛いほど伝わってくる中、不思議な平穏の瞬間が訪れて、茨の道の彼方に穏やかな光が提示されるのだ。



©2011 SHINYA TSUKAMOTO/KALJUVU THEATER



最新作『KOTOKO』でヴェネチアを騒然とさせた塚本晋也。日出ずる国の歌姫Coccoが、魂の深淵に切り込んでいく本作で、母性をバンクに描く! ロベルト・シルベストリ イタリア映画評論家



塚本晋也 (つかもと・しんや)★

1960年東京都生まれ。87年自主映画『電柱小僧の冒険』で注目を集め、89年『鉄男』でローマ国際ファンタスティック映画祭グランプリ受賞。その後の国内外の映画に多大な影響を与える。ヴェネチア国際映画祭コントロロンテ部門審査員特別大賞受賞の『六月の蛇』(02年)、同映画祭コンペ部門で異例のSF映画正式上映となった『鉄男 THE BULLET MAN』(09年)などで、国内外で数多くの賞に輝いている。

『KOTOKO』

24日(日)11:00～『一枚のハガキ』(114分)



自ら「映画人生最後の作品」と語り、これを最後に昨年5月に100歳で亡くなった新藤兼人監督。遺作『一枚のハガキ』は、戦争末期に徴集された自身の実体験をもとに、死んでいった戦友と残された家族を通して、戦争の愚かしさと不条理を描き出したもの。戦争はすべての者の人生を一変させてしまうが、それでも生き残った者はすべてを失ってもなお、生きていく限り生き抜いていく。反戦とともに力強い人間讃歌でもある傑作だ。



©2011『一枚のハガキ』近代映画協会/逢迎会事務所/ブランドス



戦争の愚かしさに対する啓太と女子の怒りが頂点に達したあとで、魂が浄化されたかのように希望と再生へと繋がれていく。新藤自身の個人的な体験に基づいた反戦ドラマは、そのとき、グロテスクによって死へと導かれた94人の戦友と、たまたま生き残った戦友ひとりひとりに向けて、語りかけているのだ。エドモンド・リー タイムアウト誌 香港版



新藤兼人 (しんとう・かねと)

1912年広島県生まれ。松竹で脚本家として活躍後、50年に独立プロ「近代映画協会」を設立。51年に『愛妻物語』で監督デビュー。60年、『裸の島』でモスクワ国際映画祭グランプリ受賞。95年の『午後の遺言状』で日本アカデミー最優秀作品賞はじめ、映画賞を独占。そのほかの作品に『原爆の子』(52年)、『第五福丸丸』(59年)、『鬼婆』(64年)、『裸の十九才』(70年)、『運東綺譚』(92年)など、多数。

『一枚のハガキ』

24日(日) 13:30～『エンディングノート』(90分)



幼い頃からビデオカメラで家族を撮ってきた砂田麻美は大学卒業後に助監督として映画制作に関わっていた。そんなとき、定年退職直後の父にガンが発覚。砂田監督は明るく前向きに闘病する父と家族にカメラを向けた。次第に弱っていく父や家族の諍いにもカメラを向け続けた勇氣は、自分の葬儀の詳細な段取りまで書き残した父の熱血人生をときにユーモラスに讃える感動作『エンディングノート』として結晶した。



©2011『エンディングノート』製作委員会



自分を仕事人間と好んで卑下し、確かにその要素は彼の中に残っているものの、家族は海外からも彼のそばに駆けつける。家族たちの人生は彼という存在のおかげでよりよいものになったのだ。砂田の映画は観客をも彼女の家族の一員のように近づけ、彼が最後の別れを言う場面では、映画館の全員が涙にくれる。リチャード・グレイ オーストラリア ザ・リアルピッツ・コム



砂田麻美 (すなだ・まみ)★

1978年東京都生まれ。慶應義塾大学総合政策学部在学中よりドキュメンタリーを学び、卒業後はフリーの監督助手として河瀬直美、岩井俊二、是枝裕和などの監督のもと、映画制作に従事。『エンディングノート』が第1回監督作品となる。

『エンディングノート』

24日(日) 16:30～『サウダーヂ』(167分)



山梨県甲府市で生まれ育った富田克也監督の『サウダーヂ』は、シャッター商店街と化した甲府の中心地を舞台にしている。タイ人ホステスに入れ込む男が所属する小さな土木会社の仕事は激減、ブラジルからの移民労働者がコミュニティを作り、青年はラップで怒りをぶちまける。誰もが大きな不安と焦燥を抱え、街の空洞化と呼応するように心に空洞を抱えている。そんな今の現状を167分の群像劇で熱く描きつくした、甲府物語。



©KUZOKU-All right reserved



『国道20号線』に続く富田監督の低予算映画は、その長さにも関わらず、ナント三大陸映画祭の観客に最大の賛辞を与えられてグランプリを獲得した。監督の生まれ故郷の静かなる絶望を巧みに描き出した点が高く評価されたのだ。デボラ・ヤング ハリウッド・レポーター誌



富田克也 (とみた・かつや)★

1972年山梨県生まれ。東海大学甲府高等学校卒業後、都内で配送業に従事しながら、製作期間5年、上映時間140分の処女作『雲の上』を2003年に発表。映画美学校映画祭2004の最優秀スカラシップを受賞。この賞金をもとに『国道20号線』を製作、07年に発表。『映画芸術』誌の2007年日本映画ベスト9位に選出された。

『サウダーヂ』